

# 花の歌歳時記

前田康子

「わたしのいちばん好きな植物は『蒲の穂わた』です」詩人の伊藤比呂美さんはエッセイ集の書き出しにこう書いている。それも一、二歳の頃に好きになったのだという。

蒲の穂にこだわって、いろいろなことを伊藤さんは書いている。その文章が好きでたびたび読み返す。根ごと引き抜いてプランターに移植した。生えていた湿地帯が県により整備されることになり、新聞に反対の記事を書いたりしたらしい。しかし結局それは刈られることとなり、伊藤さんは子供さんと、蒲の穂をはさみで切って来て家中に飾ったという。蒲の穂に一度だけ触れたことがある。夏頃に穂ができるのだが、春先までそれが残っていたものだった。とても暖かだったので驚いた。そして柔らかかった。

母親同士で話していると、芝生のある所が自然のある所だと思っている人がいる。蒲の穂のことで喜んだり、嘆いたりしている伊藤さんのような母親にはまだ会わない。



絵・アサガオ／小柳吉次

## 立葵

立葵の花はけっこう古い花で、平安時代頃に、中国から日本に入ってきたらしい。ふつう六月から七月にかけて開花するが、春まき一年草のものは八月の花壇でも目立つ花である。遠くの方で咲いていても、花が、大きな

眼のように見え、誰かに見られているような気分になる。

曇りたるままくれゆくに立葵の花の輪郭  
鋭き時間ある

真鍋美恵子「雲熟れやまず」

一見、西洋の花のようなあでやかさのある

立葵。公園や堤防に植えられていて真夏の青空によく似合う。

口つぐむわれに見よとぞ咲きのほりいた  
だきに咲く立葵の花

玉井清弘「風箏」

一読、「沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ」という斎藤茂吉の歌を思い出す。立葵の花は下から順々に咲いていく。一番上の花が咲いたとき高い花なので見降ろされているような感じである。

華やかな管縦横に打ち合えり立葵しどろ  
に揺るる疾風

高安国世「街上」

立葵は下の方の花が咲いているとき、上の方はとがってみえる。それが揺れるとまさに筈のように見えるのだ。

この歌について永田和宏は、高安国世との出会いの歌だと書いている。また、初めて高安氏の研究室を訪れたとき、この花が窓の下に、この歌のように咲き揺れていたという。美しいけれど、きびしい何かが一首を貫いている。

たちあおい  
立葵





## えのころぐさ

いろいろな花をこの文章で取り上げてきたが、私は結局えのころぐさを見ているのが一番好きなのである。今まで、生きてきて、どれくらいえのころぐさを摘み、見てきたことだろう。

時空とは何なんだろうねこじやらし秋から冬へおまえはいない

永田 紅「塔」平成四年五月号

この歌は作者が十代の頃に作った歌である。えのころぐさは別名ねこじやらしとも言いが、本当にこの草で猫と遊ぶと、猫は喜んで、じやれてくる。

ねこじやらしと時空という言葉が一首の中で出会って、不思議な感じのする作品である。  
来む世にはゑのころぐさとわがならむ抜  
かれぬやうに踏まれぬやうに

大西民子「光たばねて」

こんな風に私もえのころぐさに生まれ変わったみたいと、思っている時がある。抜かれてもいい。小さい子供たちになら。

花屋さんから花束を買って出てきた人がいた。向日葵の花だった。よく見ると向日葵と

一緒にたくさんのえのころぐさが包まれているのに驚いた。

猫じやらしの淡き黄の穂の相寄りてひかりのなかに皆顔ひつ

宮 枝「晩夏」

えのころぐさは光や風や空がよく似合う草である。えのころぐさの仲間にはいろいろな

種類があつて、キンエノコロという種類は美しい。普通のえのころぐさとちがつて穂は垂れない。光が当たると金色に見える。

ねこじやらしかやつりぐさの穂はなびき  
三とせの後の手術日けふは

上田三四二「鎮守」

癌闘病中の歌。この二年たらず後、平成が来た年に、上田三四二はこの世を去った。



## えのころぐさ



こうほね  
河骨

## 河骨

河骨は水草である。河骨という花を初めて  
教えられたとき、黄色いかわいい花のわりに  
は、不気味な名前だなあと思った。後で調べ  
ると、水の中の根が白骨のようだからついた

という。

小鯛取るわらべは去りて門川の河骨の花  
に目高群れつつ

正岡子規『子規歌集』

メダカも絶滅の危機にあると、近頃、発表

された。まだコンクリートなどなかった時代  
の子規の歌。

水生の植物というのは、土に生えるものと  
は違った趣きがある。神秘的な静かさのよう  
なものがある。

梅干しをつけるようなおきな甕をたまた  
ま拾ってきたので、そこにホテイアオイやメ  
ダカなどを入れている。暑い日にそんな水草  
を見るとほっとする。

河骨の花咲く池に鸕鷀しづかに浮きて

暑き日の午後

結城哀草果『すだま』

鸕鷀がキリキリと鳴き、誰もいないような  
夏の水辺。時間がしんと止まっているよう  
である。

河骨の花は水べに昏れのこり思ひのたま  
の揺れつつもる

佐竹彌生『天の螢』

哀しく不思議な歌である。河骨の骨という  
文字が「患ひのたま」と響き合せて、違う世  
界が見えてくる。五十歳にしてこの世を去つ  
た、佐竹彌生の才気ある歌。

まえだ・やすこ「塔」会員